

袴垂、関山にして虚死にして人を殺せる語(今昔物語集卷二十九第十九)

今昔物語のクライム譚。袴垂は教科書にも登場する有名な人物だ。

この話に出て来る恐ろしい袴垂。その袴垂を笛で恐れさせたからこそ保昌はスゴイということになる。

今は昔、袴垂と言ふ盗人有り。

盗を以て業として有ければ、捕へられて獄にいましめられたりけるが、大赦に掃はれて出でにけるが、立寄るべき所も無く、すべき方もおぼえざりければ、関山に行きて、露身に懸けたる物も無く、裸にて虚死をして、路辺に臥せりければ、路行き違ふ者共、これを見て、「こは何にして死にたる者にか有らむ。疵もなきは」と、見あつかひ言ひののしりける程に、よき馬に乗りたる兵の、調度を負いて、あまたの郎等・眷属を具して、京の方より来たりけるが、かく人の多く立ちもとおりて物を見るを見て、馬を急と留めて、従者を寄せて、「あれは何を見るぞ」と見せければ、従者走り寄りて見て、「疵も無き死人の候ふ也」と言いければ、主しか聞くままに引組みて、弓を取り直して、馬を押去りて、死人の有る方に目を懸けて過ければ、これを見る人、手を叩いて咲ひけり。「さばかり郎等・眷属を具したる兵の、死人に会て心地きがすはいみじき武者かな」など、咲ひ嘲けりける程に、武者は過ぎて行にけり。

その後、人皆行き散りなどして、死人の辺に人も無かりける程に、また武者の通る有けり。これは、郎等・眷属も無し。只調度を負いて、この死人に只うち打懸りて「哀れなる者かな。いかにして死たるにか有らむ。疵も無し」など言て、弓を以て差引などするを、この死人、やがてその弓に取りすがりて、起き走りて、馬より引き落して、「おやの敵をばかくぞする」と言ふままに、武者の前に差たる刀を引抜て、差し殺してけり。

さて、その水早袴を曳剥て打着て、弓・胡録を取てかき負いて、その馬に這い乗りて、飛ぶが如くに東様に行けるに、同様に掃はれて裸なる者共、二十人許り言ひ契りたりければ、末に来り会たりけるを共人として、道に会と会ふ者の水早袴・馬などを取り、弓箭・兵仗を多く奪い取りて、その裸なる者共に着せ、兵具を調べ、馬に乗せて、郎等二十人具したる者にてぞ下りければ、会ふ敵無き者にてぞ有ける。

かかる者は、少しの隙も有れば、かかる事をする也。それを知らで、近

1 傍線は読解に役立つ

重要語。数字は読解で意識するポイント。なお、今昔物語は、平安の「かな」文体ではなく、漢文調で記述されており、送り仮名・読みも本則でない使い方がされている、一部現代仮名遣い。ただ、漢文学習者にはよくお目にかかる文字・読みが多いので難しくはなさそう。(岩波文庫版使用)

2 平安中期の伝説的泥棒。「保昌と袴垂」を取り上げられている教科書もある。

3 そらじに死んだぶり

4 臆病風をふかす

5 馬ですぐ傍まで近づいて

6 つついたりする

7 示し合わせてあったので

8 落ち合って合流して

9 無敵だった

く打寄りて、たよりに有らむには、まき当に取付かぬ様は有なむや。初め心<sup>10</sup>  
地立て過し馬乗を、「誰にか有らむ。賢かりし者かな」と思ひて問ひ尋ね  
ければ、村岡の五郎平の貞道と言ける者也けり。その人と聞きてければ、  
人、「ことわり也けり」となむ言ける。「さばかり郎等・眷属有けれども、  
これを知てたゆまずして通りけむ、賢き事也。それに、従者も無き者の、  
近く打寄て殺さるる、はかなき事也」とぞ、聞く人、讃めも誇りも言ひ  
あつかいけるとなむ語り伝へたるとや。

問1 傍線A、この同格の「の」はどこまでかかるか訳で示せ。

問2 傍線B、見物人はなぜ笑ったのか。また、武者が用心して通り過  
ぎたことの筆者の評価について述べよ。

<sup>10</sup> とりつきやすい状態  
でいた

<sup>11</sup> 警戒して